

## 早稲田学園を去るに当って

### —早稲田界限の今昔—

依 田 憲 家<sup>†</sup>

この3月でいよいよ定年退職を迎え、50年前に入学し、40年近くも勤務した大学を去ってゆく。

同時にこの早稲田の地は、筆者の生まれ育った地でもあり、思い出は70年近くにわたる事になる。学園を去るに当って、その間の幾つかの思い出と大学界限の昔の様相を記してみよう。

薄暗い階段の上に掛けられた幾つかの假面…椅子に腰掛けた人物の銅像…部屋いっぱいに並べられた、まるで木のような古代象の化石…こういったものが、まだ小学校にも上がらない頃の、父に手を引かれた筆者の早稲田大学への最初のほのかな印象である。

後から考えてみると、階段の假面は演劇博物館の一隅であり、椅子に腰掛けた銅像は、長く総長をつとめた高田早苗氏の銅像である（正面に大隈侯の銅像があるが、幼児の背丈の関係から座像の方が印象に残ったと思われる）。古代象の化石は部屋いっぱいに並べられていたが、特に牙と臼歯が印象的であり、また展示室の一隅のガラス・ケースの中に展示されていた、一体分の子象の化石も印象的に残っている。そこは理工学部の建物で採鉱冶金学科（後に資源工学科と金属工学科に分かる）の地質学教室であったと思われる。そこには主任の徳永重康博士の下で当時嘱託のような形で勤務されていた後の著名な古生物学者直良信夫氏も居られたかも知れない。戦後文学部で直良先生の授業を受けた時、あの古代象の化石についてお聞きしたところ、「あれは戦災で焼けました」との事であった。

その時の建物も戦災で焼失したが、その跡に筆者が30年以上も勤務することになる社会科学研究所の研究室が出来ることになるのである。

筆者は1931年4月に早稲田大学から歩いて10数分の所にある早稲田南町で生まれた。同じ町内に夏目漱石終焉の邸があった。筆者は10年程前までその町に住んでいた。父・兄・叔父も早稲田に学び、後には筆者の甥や姪も何人か入学している。そのような点から校歌「都の西北」なども物心ついた頃より記憶していた。

小学校は牛込区（現在の新宿区の一部）の区立早稲田小学校である。大学に近いこともあって、町内には下宿屋や学生に部屋を貸している素人下宿もあり、早慶戦の夜などは附近の大通りを高歌放吟して歩く学生の声が聞こえ、朝早くには大隈講堂の鐘のもよく聞えた。小学校1年の春の遠足は、今の文学部のそばの戸山ハイツに当時あった近衛騎兵聯隊で、そこに野生の雉が居たというような事は、今では

---

<sup>†</sup> 早稲田大学アジア太平洋研究センター教授

想像もつかない事であろう。この聯隊は先に三角形の紅白の儀杖旗をつけた槍を持って、馬上よく早稲田通りを行進したものであった。このあたりの小学生の宇宙<sup>はて</sup>の果は東は九段の靖国神社で春と秋の大祭には神楽坂の手前から九段まで露店が並んだ。西の果ては高田馬場のガードで、このあたりの小学生は、「高田馬場のガードの向うに住むのは田舎者」というような生意気な気分を持っていた。現在の理工学部あたりは陸軍の射撃場で時々銃声が聞こえて来た。

その小学校の通学範囲は大体穴八幡のあたりまでで、そのあたりまでは友達が居た。従って大隈講堂のあたりまでが遊びの範囲内であった。現在でも大隈講堂の前の広場で遊んでいる子供たちを見かけるが、筆者はあれらのなれの果てである。いろは歌留多に「門前の小僧、習はぬ経を読む」というのがある。筆者はまさに早稲田大学の門前の小僧であったわけであるが、その小僧はどうもお経は上手でなかったようである。

大隈講堂の横を東に向かう早大通りは、現在では中央にグリーンベルトがあるが、戦前はそこにも一列の家並みがあり、つまり二本の道が並行しており、両方を当時「大学通り」と呼んでいた。大正時代に山手線が開通し、高田馬場方面からの通学が主流となるまでは九段・神田方面からの通学が多く、そのため正門は東に向かって作られていた。

戦前の「大学通り」は、いわば早稲田大学の門前町であり、道路も狭く、いわゆるカスバのようなもので、飲み屋・バー・喫茶店・軽食堂などのほか、お好み焼き・碁会所・ビリヤード・麻雀倶楽部・射的場などが軒<sup>のき</sup>を並べ、夏には附近の空地に笹竹で囲った「お化屋敷」などの見せ物小屋が掛るといふ、筆者の住んでいた附近で最も近い「盛り場」であった。薩摩芋を油であげて糖蜜をくぐらせた「大学芋」と称するものは、このあたりが発生地といわれている（但しそれは「女子大芋」ともよばれていたといふ説もあるので、或は目白の方が本家かもしれない）。

このあたりまでが筆者の通っていた小学校の児童の行動範囲であり、仲々楽しい所であったが、同時にそこは附近の鶴巻小学校や山吹小学校（現在の赤城台高校の場所にあった）の児童の行動範囲でもあり、時々こわい年上の「いじめっ児」が居るといふので、一人で行く時は多少警戒を要する場所でもあった。或時こちらの豪の者が「俺はあそこで、鶴巻！ ずる巻！ 腰巻！ のり巻！ と3度怒鳴ってみせろ」と称し、それを実行したところ、忽ち恐ろしげな数人のあんちゃんが「おい！ もう一度云ってみろ！」と出て来たので、ついていった者もほうほうの体で逃げ帰ったこともあった。

小学校3年位の時、日米戦争開始の前夜、ルーズベルト大統領の信頼厚かった斎藤大使が米国でなくなり、その遺骨を送って来航したアメリカ巡洋艦アストリア号乗組員の歓迎会が大隈講堂で行われ、附近の小学生は日の丸と星条旗の小旗を持って講堂附近に並んで迎えた。紺の服に白い帽子のアメリカ水兵たちは、旗を振って迎える小学生に手を振って「バンザイ」などと盛んに愛嬌を振りまいていたが、当時は行進の際には前方のみを見て「一糸乱れず」行進する日本の水兵にくらべ、随分ちがったものだと印象を受けた。そして、その2年後にはドーリットル空襲が、東京に対する最初の爆弾を大隈講堂の近くに投下することになる。

日米開戦の数日後、周辺の幾つかの小学校の児童は、現在は図書館とアジア太平洋研究センターの建っている戸塚球場に集められ、そこで「宣戦の詔勅」を聞いた。

小学校卒業の年は敗戦の一年前であり、戦局は日々に不利となり、サイパン島も失陥し、アメリカの本格的戦略爆撃がまさに始まろうとしており、疎開が奨励されるようになっていた。そのため筆者は郷里の長野県の家へ疎開し、その地の旧制中学に入った。

1945年8月15日、日本は無条件降伏し、1931年以来の「15年戦争」は終わった。東京は前年末から激しい空襲に見舞われており、戦後も厳しい食糧難・住宅難にさらされていたため、筆者は1949年まで長野県で過ごした。その頃は殆ど半年毎に学制が変る時代であり、同じ学年でも或者は旧制中学で卒業し、或者は新制高校に編入されるといった状況であった。そうこうしているうちに、1949年4月から新制大学の発足と同時に、早稲田大学は旧制の大学予科であった旧制高等学院を廃止するとともに、新制の高等学院を設立し、その1年・2年・3年を同時に募集した。それは旧制高等学院の1年生が新制大学1年に移行したため、新制高等学院を1年のみ募集するとすれば、2年間のブランクが生じてしまうためにとった処置であると思われる。こうして筆者は新制高等学院の2年に編入された。

5年ぶりに上京して見た「故郷」早稲田は何と変わりはてていたことか！ 大隈講堂の時計台は変わらずそびえていたが、「大学通り」をはじめすっかり焼払われ、附近の小学校の焼ビルには、焼け出された人々が体操場などにベニヤ板で囲いを作って住んでおり、穴八幡の石段に立てば、遠く九段まで見渡せる程の一面の焼野原であった。附近に住んでいた小学校の友達も2、3の例外をのぞいて消息が知れなかった。

爆撃による大学の被害も大きく、旧大隈邸であった戦前の書院造の大隈会館は跡かたもなく、かつての庭苑は見るも無残に荒廃し、演劇博物館は屋根だけやられたのがせめてもの幸いで、その屋根はトタン板で覆われていた。三田の慶応図書館と共に明治天皇からの「御下賜金」で建てられたという「恩賜館」は赤レンガの外壁のみを残していた。各学部の建物も、窓から焼夷弾が飛込んで焼けた教室も多く、天井がなく、下から天井裏の電線が見え、そこから裸電球がぶら下がっているといった、いかにもわびしい光景であった。

学内とその周囲は戦災によって大きな被害を受けていたが、高田馬場へ向う大通りは無事で、その古本屋街も戦災をまぬがれた事はせめてもの幸いであった。また東京の多人数を収容できる建物の多くが戦災や進駐軍（占領軍）向けの劇場として接收されていたため、都内には多人数を収容できる場所は神田の共立講堂か早稲田の大隈講堂ぐらいのもので、そのためそこで戦後活動を再開したオペラや新劇の公演が多く行われ、それらを比較的身近なものとすることもできた。

大学のなかには学生であふれていた。「学徒出陣」でかり出された学生がどっと復員し、陸軍士官学校、海軍兵学校その他軍関係の学校に在籍していた者が、軍の解体に併って多く編入されたため、学生数は異常に膨張していた。当時衣食住は極端に欠乏していたため、それらの多くの学生は軍服を着たままであり、学内には陸軍のカーキ色、海軍の茄子紺があふれ、その間に黒い学生服が交るといった有様で

あった。大学附近の喫茶店も再開されていたが、原料が輸入品である本当のコーヒーはなく、豆のこがしたものにサッカリン等の化学薬品で甘味をつけたものであった。

入学した新制高等学院も今から考えると随分変わった学校であった。早稲田大学は新制高校の母体となる旧制中学を持たなかったため、新制高等学院は旧制高等学院から看板をぬりかえただけのようのものであった（「旧制」、「新制」は制度上のみの区別であって、名称に一々それがつくわけではないので、名称すらも殆ど変らなかった）。その年3月まで旧制高等学院で使っていた建物（現在の文学部の所にあった）が、4月から新制の建物となり、学院長・教頭は旧制のそれがそのまま留任し、教員も殆どそのまま、学部の教員を兼ねている先生も多かった。文科と理科に分れ、外国語は英・独・仏・露のどれを第一外国語としてもよく、ロシア語を第一外国語とする者も数人居た。文芸を教育学部国語国文学科の教授でもある竹野長治院長が担当し、哲学を文学部の樫山欽四郎教授が担当するといった有様であった。

学生も多様で、旧制中学を卒業または4年終了で何年も浪人していた者が、次の年から新制高校卒の資格のない者は大学に入学できない事になったので、あわてて入って来た者もかなり居た。

以上のようにして入学したのは今から約50年前の事であるが、それから今日までその学園内で過すことになるのであった。学部は文学部の史学科に進み、東洋史と日本史の両専攻をそれぞれ3年ずつ6年間かけて学んだ（卒業は日本史）。両専攻に学んだことはその後の研究におおいに役立ったといえる。大学院は商研の経済史専攻であった。

50年に及ぶ学園生活の大部分を占めるものが早稲田大学社会科学研究所における勤務であり、1958年に嘱託として勤務して以来、助手・専任講師・助教授・教授として、1998年4月に同研究所がアジア太平洋研究センターに発展するまで続くのである。その間に一番思い出の深いことは、縁があって多くの中国の訪問学者を迎え、また日本で研究する中国の大学院ドクターコース在学者の日本側指導教授を引受けた事である。それらの数多くの人達が現在中国の各大学や研究機関で要職についており、日本の大学で教えている人もある。最近では筆者の古稀を祝って中国で記念論文集を発行する計画をすすめてくれている事も有難いことである。

また勤務の終わりの数年間にアジア太平洋研究センターの設立に参画し、設立後は多くの留学生を含む大学院の学生諸君と合宿や調査・実習旅行の機会を何回も持つ事ができた事も楽しい思い出になるといえよう。

最後に早稲田大学を去るに当たって、消え去る老兵から早稲田大学の伝統から見た、アジア太平洋研究センターの将来について、一言述べさせていただきたい。

120年にもなる早稲田大学の特徴と伝統は、今迄多くの人によって語られている。筆者は特に早稲田大学は早くから研究者の養成に力を入れた大学であった事を強調したい。

早稲田大学は明治の中期以降に既にかかなりの数の研究者を育てている。それは建学の精神である「学問の独立」は、研究者の養成なくしては実現できないという考えによるものと思われる。帝国大学卒業の既成の学者を採用するよりも、下から研究者を育てる方が経済的にもはるかに金のかかる事である

が、それを敢えて早くから行った事は、当時としては卓見であったといえよう。そのため大正時代には各学部の主な授業は、そうして養成された教員によって行われるようになった。この点、他の私学とくらべて頭抜けて早く、東京大学を除く国立大学よりもかなり早いのである。

同時にその頃は、養成された研究者を帝国大学やその勢力下にあった各学校で採用してくれたかといえば、東北帝国大学における村岡典嗣氏などの例外を除いて非常に少なかったのである。そのため、そうした研究者は母校において採用し活用する以外に道はなかったのである。またそのような可能性があったればこそ、若い研究者は希望をもって研究にはげむ事ができたのである。この数年来学園の内外から批判されてきた「教員が大部分自校出身者で占められている」という点も、実は以上のような点から生じたもので、「早くから研究者の養成につとめ、またそれができた」という面があったのである。

現在においては時代は大きく変っているし、研究者はその出身校や国籍のいかんを問わず、優秀な人材を採用すべきであることは云うまでもないし、養成した研究者も広く内外で活動してもらいたい。

同時に筆者は、早稲田大学は早くから研究者の養成につとめ、またそれが出来た大学であるという点は、これからも大切にしなければならないと考える。

本研究科を始め、他の学部・研究科にしても、研究者の養成のみが目的でなく、実業・ジャーナリズム、公的機関その他の分野で活動する人材の養成も大切である。しかし、研究者を養成できる大学である事は根本的な問題であって、そのような大学こそが次の時代にも発展し続けることができると信じるものである。その一つの手段として、「早稲田大学アジア太平洋学会」といったものを結成し、若い研究者に研究と発表の機会を与え、或は広く内外の研究者との交流の場とする事も考えてよいのではないかと考える。